コロナ下で増えた進行がん

がん社会を診る

中川 恵一

横浜市立大学を中心とする研究グループは9月に、新型コロナウイルスの流行によって、早期がんが減り、進行がんが増えたという衝撃的な調査結果を発表しました。

横浜市立大病院と国立病院機構横浜医療センターにおいて、2017年から20年までの4年間に新規に消化器系のがんである食道がん、胃がん、大腸がん、膵（すい）がん、肝臓がん、胆道がんと診断された患者5千人超が調査対象です。

日本でコロナが本格的に流行し始めた20年3月以降を流行期、それ以前を流行前として比較したところ、流行期の患者数は、流行前と比べて、胃がんでは26・9％、大腸がんでは13・5％と有意な減少が見られました。食道がん、肝臓がん、胆道がんでも患者数は減少していましたが有意差はありませんでした。膵がんはほぼ不変でした。

ステージ別分析の結果、胃がんと大腸がんは、コロナ流行前と比べて、流行期では早期がんの患者数が減っていることが分かりました。

固形がんの進行度は、粘膜内にとどまるステージ0から、転移があり治癒が難しくなるステージ4に分けられます。

今回の調査では、ステージ0、1といった早期の大腸がんの患者数がコロナ流行期は流行前より3割以上減っていました（有意差あり）。やや進行したステージ2（粘膜の外側の筋肉の層までがんが進展するがリンパ節の転移はない）でも、35％減と有意な減少がみられました。

一方、リンパ節の転移があり、抗がん剤などの補助治療を要するステージ3は約7割増でした（有意差あり）。

胃がんでも、ステージ1の患者数が有意に減っていました。その他のがんでは、有意な変化は認めませんでした。

日本では海外のような厳格なロックダウンはせず、医療へのアクセスについても制限は原則、実施されていません。この研究でも、再診患者の数については、流行前後で有意な減少はありませんでした。

これは非常に重要なポイントですが、「がんは症状を出しにくい病気」です。早期がんで症状が出ることはまずありません。がんを早期のうちに診断できる時間は1～2年位ですから、体調が万全でも、定期的に検診を受けることが必要です。

しかし、自治体によるがん検診（住民検診）の受診者は、20年は前年より3割も減りました。そして、消化器系のがんのうち、住民検診の対象は胃がんと大腸がんだけ。がん検診の受診減が、早期の胃がん・大腸がんの減少につながった可能性があります。

コロナでがん死亡急増が現実になりつつあります。

（東京大学特任教授）

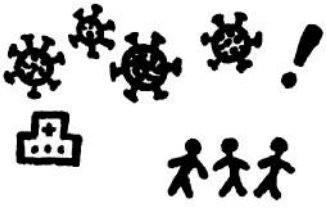

イラスト　中村　久美